

フレーベルの遊戯論

白根孝之

本文はエリザベート・プロッヒマン、ヘルマンノール、エリッヒ・ヴェーニガの編輯になる「教育學小テキスト叢書」の第四卷として、フレーベルの「人の教育」「幼稚園の本質」の中から特に遊戯に關する部分を集めたものに冠したプロッヒマンの敘文の紹介である。

一

遊戯に關する理論は實にフレーベルの全教育學の核心を形成するものであつて、その全貌は彼が六十歳代になつて始めて明かにしたものはあるが、フレーベルの思想の全體系は此の遊戯觀から理解されねばならない。

フレーベルが性來子供に對して深い愛情をもつてゐたことは言ふ迄もない事實であつて、子供の魂の愛らしい動きは彼の心の奥底に迄惠まれた光を投げかけ、教育に對するフレーベルの態度には實際作品に臨む藝術家の情熱と喜び

とがあつた。同時に、子供の本性に關する彼の見方は人間そのものゝ意義に就いての彼の思想によつて規定されたものであつた。而して人生の精神化——これがフレーベルにまつては人間生活の窮極の目的であつた。而して精神化には凡て一の統一がなくてはならない、此の統一に向つて凡ゆる欲望や衝動を秩序つけるのが即ち人生の精神化である。此の統一から自己の人生を形成し之に意義を與へるのが、全ての人間の力むべき人生の目的である。教育は子供に此の統一の意識を喚起し、同時に此の統一——フレーベルは之を“Lebensringung”と言ふ——への意志を強めることを以て使命とする。意識といふことは、彼にまつて人間——言葉の最も深い意味に於ける人間」の向上に於ける不可欠の第一段階であつた。

「子供の正しい取扱」いふことがフレーベルの最初から

の念願であつた。一切の精神的本性は子供が此の世に生れた第一聲から彼等の中に動き始める、四肢を働かせてやまない活動慾がそれである、不快や苦痛に對する反撥がそれである。而して子供のかうした活動の中に既に彼等を取巻く自然や人間の統一を把握せんとする希望が現れてゐる、

環境の統一とは即ち環境との精神的接觸である、子供が環境に精神的に接觸する時、其は彼等に大きな幸福感を與へ、天眞の笑ひなつて外部に現れる。此の能力は人間の陶冶性の最も重要なモメントである。

子供に本有的な活動慾そのものが既に人生の根本的關係を理解把握せんとするこゝに向けられるといふこゝは、教育上の大切な手がかりである。然し此の關係は子供にあつては單純な象徴の形式に於て現れる。即ち彼等は簡單な遊具・お伽噺の内容・或る意味を寓した舞踊や遊戯に於て、象徴的な人生の法則を見るのである。彼等に於て人生は單純な根本的理法に基き、比譬によつて容易に捉へることが出来るものである。それは自然界についても人間の社會關係についても同様である。それ故に世界に人生は簡單な日

常經驗に於て理解され、簡單な對象に於て世界の反映、最高の真理の象徴が見られるのである。

「人は彼自身の内的生活にその經驗によつて、推理・認識・自意識に達するものである、このこゝは自分が子供の遊戯に活動しについて知つた所であり、且つ彼等をして自由にしての獨自の内的生活を営ましめんとする所以である。

——生命の最高の要求、最深の認識には普遍的に妥當する生命の體驗と言葉がある、それは眞實に自己の生命の發展を辿り、之を意識に齎さんとする凡ての人間が切實に知る所である。」

「……子供の魂は靜かで滑らかな水面の如く、假令それが一握りの水、否一粒の水滴であつても、四圍の自然に大空を反映する」

二

併し子供に與へられる全てのものが同じやうな意義と價值をもち、上に言つた簡單な人生の根本經驗を同じやうな明確さに於て可能ならしめるのではない。それ故に子供がそれによつて「遊戯しつゝ作業する」道具を始めて之に與

へるには、深い注意が必要なのである。而してフレーベルは毬や球や立方體をもつて幼児に最も適當な玩具、彼等の精神的陶冶の根本手段を考へた。特に毬はフレーベルによれば最も簡單にして完全な世界の模型であり、手輕で幾重にも使用できる等の長所があり、最初の精神的經驗を得さすものとして是最適な器具である。獲得し所有・結合を分離・現在を未來を過去・多様を統一等あらゆる生活範疇が斯うした器具を使用する遊戲に於て知られる。而して此の體驗・知識こそは彼等の魂がやがて明かな型を得る芽生えである。子供の心に投ずる之等の遊びを「清く明く」、靜かに然も確實に繰返させ、內的に完成させることが、遊びの道具の選擇について我々の第二の仕事である。

そこで子供が自分の世界を構成する精神的要素は何かといふ問題が生れて來る。遊戲は子供と事物との最も快適な精神的接觸であり、彼等の精神性がそこに於て生長することとは言ふ迄もない事である。而して子供の遊戲的現象の奧には一の意味的統一・聯絡・法則がある。此の法則をフレーベルは數學的な合法則性を考へた。勿論それは我々成人の

嚴密な學的數學ではなく、分量や秩序や區分をやはり象徴的に現はす一種のロマンティックな數學ではあるが。故に人間の精神的本能の向けられる不可見のもの意味ある內的關係の把握を誘發し之を強むべき恩物は、又「數學的」な構造をもつものでなくてはならない。フレーベルが最初の玩具に球體や立方體を選んだのは人間の精神的構造に關するかゝる見解に基くのである。

然し子供が遊戲に於て把握する意味の統一は數學的であるのみでなく、更に哲學的・藝術的である。遊戲も歌も、伽嘶も音樂も數學的統一をもつばかりでなく、更に生命そのもの、反映である。生命そのもの、事物の最奥の本質は又「母の愛撫の歌」竝にその延長である遊戲のつれ歌に於ても現れる。子供は黙つて遊ぶものではなく、常に何事か語り乍ら、歌ひ乍ら遊戲する。彼等の遊戲が象徴的活動である所以がこゝにある。従つてそれは幼児保育に新しい問題を提出するものである。健全な眞に母親の如き保育は幼児に自ら遊戲の歌を發見さすものである。フレーベルに從へば凡て幼児と共にする遊戲は歌を伴はねばならない、之

によつて始めて共同の遊びやし、こ、が彼等の意識に上り、且つ意義を得てくる。その歌は理由を説明する如きものではなく、暗示的でなくてはならない。それは精神的に潑刺たる幼児の意味ある対象を而して之を指導する人との相關作用から生れる眞の藝術品、すぐれた即興詩である。自身すぐれた即興詩人の一人であつたフレーベルは言つてゐる。

「自分が完全に自分から離れて子供を一心になり、子供の心の波に乗つて動かされる時程幸福な時はない。我々の童謡の大部分は、遊戯する子供の直接の觀察から生れたもの、子供の全一の精神から新しく創作されたものである。……子供の歌は全體の思想としては定つたものでなく、なくてはならないが、その表出の特別の形や様式は恵まれた瞬間の産物でなくてはならない。巧まず自由に生れたものであればある程、それは美しい遊戯の表現である」。

遊戯に對するかゝる態度はフレーベルの教育觀そのものからの當然の歸結として現れたものであるが、更に別の所では彼の教育觀を一層明瞭に次のやうに言つてゐる、

「生活の概念の本質は雜多の現象の中に存する統一である、總て生命をもつものは個々の部分をもち、雜多の現象を示すが、各部分は内部的に統一され、雜多の中に一貫した理がある。故に統一は生命の根據であり、現象は之から發し之に維持される」。

「教育の使命は此の統一を自己に於て發展表現せしめ、外的現象に於て自己の統一を發現せしめるにある」。

「自然が發展を陶冶の最初の重要な手段として人に與へたものはその活動性である。活動衝動は人生に於て最も重要な性質である。嬰兒の時期の終るに共に此の衝動は造形・造作の形をこつて現れる……此の衝動には又藝術心が結合する……かゝる天性を顧みず或は誤つて解するなら、幼兒は却つて惡戯に赴く」。

「全體の精神を掴み、此の精神を幼兒の要求に自己を捧げるに吝かであつてはならない。全體の理念は私にこつて最も親愛なる指導者である、私は最も信實にして好意ある人生を魂の友として此の理念に従ふ、而して子供の純潔・天真にして然も抗し得ざる力は、私の師である、私は彼等の

生徒として誠實に信頼を満足を以て彼等に従ふ。何事でもまれよく行かない場合、それは第一に私の責任である」。

三

事物が世界を反映し、更にその事物は人間の反映であるといふことは、遊戯の一面にすぎない。即ち遊戯といふ幼兒の經驗は事物に對して働らきかける活動であり、彼等の之による認識や理解は極く初期の段階に於ても行動を結びつき、且つ年齢が進むにつれてますます積極的な活動ならんとする傾向を示す。「遊戯は生活にはそれ自身の法則として幼兒の精神・氣質・行爲能力に影響を及ぼす、此の事實を無視して唯無暗に遊戯や經驗を與へても、其は何等の效果なく、又何等の興味をも喚起させない。このことは幼兒の發達の抑々の初めに於ても同様である。或ものを形成せん爲の生活、或ものを獲得せんための遊戯のみが彼等に喜び満足を與へる」。至て形成は多くの部分的個々物を結合統一して一の全體を作るこゝである。眞の遊戯に於ては幼兒の受動的な知覺を積極的な創造形成が、各その

部分を提げて一の全體に統一され、幼い彼等の心の生活を早くも深い意味で満たす。問題の解決は全てを統一した全體の意味を把握することに他ならない。そこに生活の眞の喜び、從つて將來の發達への大きな推進力がある。從つて幼兒の遊戯指導者の第三の、而して最も重大な任務は、幼兒をして遊戯に於ける最高度の活動性に到達せしめ、そこに受容を形成の統一を實現せしめるにある。

幼兒を指導者の關係は強制や權威であつてはならないが、半面に於て何らの統制のない自由であつたなら、上に述べた如き教育の目的も任務も云々することができないであらう。之と同じく遊戯そのものの中にも自由を束縛が存する。フレイベルに於て遊戯は單なる空想力の放散でもなく、又萌え出る生命力の解放でもなかつた。遊戯も亦人間の生活の精神化に役立つ精神的なるものとして、法則を秩序をその中に存せねばならない。遊戯に於ける無價値な感覺的満足の愛撫を眞に教育的な生活の喜びを區別する鍵がこゝに在るに共に、又遊戯の指導が陥り易い危険がこゝに潜む。法則を秩序を缺いた遊戯は幼兒に眞の

幸福を與へる所以でない。

「遊戯に於て最も大切なのは精神である。遊戯はなるほご四肢ミ感官——身體を使用して行はれる。幼兒の遊戯ミして我々の目に映るのは四肢・感官の動きである。然し何が遊戯を生み、生かしてゐるかと言へばそれは彼等の裡なる精神である。魂である。此の精神魂が無くなる時、遊戯は眞に幼兒の喜ではなくなるであらう。魂無き身體の運動は單なる死物の運動でしかない」。

こゝに幼兒の遊戯に指導者ミして成人が參與加入する第一の根據があるのである。幼兒ミ雖も自己の發育に於ける祕密を知つてゐる。彼等は成人の示唆がなくとも干渉を待たずとも遊びを創造してゆくであらう、そしてこの遊戯に於て彼等自身の子供の王國を築くであらう。然しそれは不完全なる、未熟なる、而して屢々遊戯のもつ危険の涯に臨んだものである。フレーベルの言葉によれば素人臭いものである。彼等は自己の行ふここの意義を自覺せず、こもすれば遊戯の危険に陥つて眞の幸福を失ひ易い。そこに幼兒の保育に従事する者が自ら彼等の生活・遊戯に加つて之を

保護し完成せしめねばならない問題がある。然もその指導たるや外的權威ミして臨む強制ではなく、幼兒ミ呼吸を相通はせる共同社會的活動でなくてはならない。かくして始めてそれは幼兒ミ保育者を一に結合する生産的な經驗ミなるのである。

かくてこゝにフレーベルの教育觀の三大原則が生れる。
(一) 子供の精神的世界は抑々の最初の印象から打建てられるものである。従つてそこに精神的・肉體的な「子供の保育」が始まらねばならない。而して保育に方つては些細な要素も重大な結果を伴ふここに注意し、細心慎重な態度を以て臨まねばならない。

(二) 子供は有ゆる合理性よりも先づ藝術的な精神性を先に發揮する。而して此の主情意的な衝動が外部に現れるのが即ち遊戯である。幼兒の精神が發達するの亦遊戯に於てである。故に幼少時の子供の教育者になるは即ち遊戯の指導者になるの謂である。

(三) 子供は自己の人生に對する關係を、「それが非人稱的事物——例へば毬の如きものに於て反映する時」最も明

瞭に意識し、次第に之を無形式なるものに高める。

フレーベルは恩物として毬・球・立方體・圓柱等と與へ、遊具として最適なものをご考へた。即ち第一の恩物は六個の色毬を入れた箱であり、是等の毬を交互に小兒の前に釣り下げて自然に形・色の知覺・運動狀態の印象を與へるもの、

第二の恩物は球・立方體・圓柱を種々の仕方を取扱はずこまによつて根本的な空間形式及び運動を直觀せしめるもの、この兩者は家庭にある幼兒に與へて幼稚園に於ける練習の準備とするものである。次に幼稚園に入つてからの作業として、第三の恩物は一立方體を縦横及び高さにて二等分して得る八箇の立方體を使用して、知識の體系・椅子・阜子階段の如き實物・裝飾的模様を形成せしめ、以て幼兒の發明的力の養成を目的としたもの、第四の恩物は一立方體を縦に二等分し、丈を四等分した八ヶの立方體で、第三のものと同じ目的に使用する。第五の恩物は立方體を縦・横・高さにて三等分した二十七の立方體、第六のものは二十七の立方體のうち六を更に二等分、他の三を縦に二等分して六の種とした複雑なもので、共に四歳以上の幼兒に就いて

上記の幾何學的・實物的・模樣的形體を形成せしめるものである。此の一見奇異に感ぜられる遊戯的作業具は、フレーベルの敍上の如き象徴的生活觀に基くものであつて、今日に於ては正當に標價されてゐないが、簡單に斥け去らるべきものではない。

四

幼兒の教育に於ける遊戯の意義についてのフレーベルの考は、既に述べた如く多年の經驗を経て漸次明かにされたものである。

フレーベルが遊戯の教育的意義に始めて注意したのは彼がイーフェルテンのペスタロッチャーの許にゐた頃（一八〇八——一八一〇年）のことであつた。クロスターマンの「フリードリヒ・フレーベルの生涯とその幼兒教育者としての業績」によれば、彼がマイニンゲン侯に死てた手紙の中に次のやうに言つてゐる。

「私は幼兒の遊戯が彼等の心情・精神・肉體を發展さすいかに大きな力をもつものであるかを發見しました。遊戯は實に子供達の道德的力の主要な根源をなすものでありま

す。遊戯は子供にまつて力を新たにし氣を爽かにする精神的入浴であることを、私ははつきり知りました。その時ははまだ遊戯の象徴的な意味に思ひいたりませんでした。心が、心から遊戯する子供の中に私の最も尊重する道徳的精神の力が躍動するのに氣がついたのです。」

之は一八二九年に書かれた手紙の一節である。そこでカイルハウに於けるフレーベルの「幼児養護所」に於ては盛に遊戯が行はれた。このことは當時同地にあつた彼の弟子の「報告」(一九〇二年)中に詳しく述べられてゐる。併ながら未だ遊戯は他の教科の補助的・準備的な意義に地位しか與へられてゐなかつた。このことは一八二九年ヘルバの小學校に於ける教案に明かに現れてゐる。「肉體は當時の考では所詮精神の道具にすぎない」とされ、従つてその教育即ち體育は準備的な意義に於てのみ考へられてゐた。自由遊戯も同様である。然るに多年の實際の経験によつて我々は兒童の遊戯に二種類あること——一は友達と一緒に行ふ共同の遊戯であり、他は自分獨りで遊ぶ個人的遊戯——そして獨りで遊ぶ場合には以前に教つたことを色々に表現し、身

體の活動によつて之を制服することを知つた。この二種類のものは一に整理結合されねばならない。かくて教授・作業・遊戯は一の連続した生活をなし、將來の理知的・行爲的・感情的の楽しい有機的生活の基礎にしなければならぬ。」(クロスターマン)

かくてフレーベルはこの頃既に遊戯の直觀陶冶的な意義を認め、一八三〇年の「人の教育の根本問題」に於て次のやうに言つてゐる。「四季折々の自然の移ろひと同じく、人間の遊戯やお祭りも幼児にまつては精神的陶冶に作用するものである。自然の影響は子供の智慧を増進するに對して、遊戯に於ては多面的な人間性が美しい調和に統一される。従つて之を教育に利用することによつて、人間の尊い本質がますます美しく輝き出る。即ちそれは各種の事態に於て大きな有機的全體の調和的な一員、人間の本質の啓示者として行動する人を育てる……。」

次いでフレーベルはその教育的實際活動を進めるにつれて子供の活動慾・遊戯本能の本性性をますます明かに意識し、實際の経験に基いて此の衝動に對應する教育手段とし

て「遊戯箱」を考案するにいたつたのである。それは言ふ迄もなく「遊戯・創造的自己活動・自由活動的自己教育」によつて、人間の發展に資するこゝを目的としたものに他ならぬ。彼獨特の教育手段として球體・立方體・球を發見したのはこの頃——一八三七年の頃のこゝである。こゝにフレーベルの遊戯観はその基礎を定められたと言ふこゝができる。而して彼がこの遊戯観を實際に實現するものとして「子供の眞の園」^{ガルトン}として、「子供を庭園の花のやうに生々しく、快活に、力強く、明朗に、然も木犀草や堇のやうに優美しくあざけなく」育てる場所としての幼稚園をルドルシュタットに設けたのは一八四〇年のこゝである。

五

フレーベルの遊戯及び思物は一の形式から他の形成へ——即ち球から立方體を経て四角形へ、更に四角形から逆に球へ、立體から面——線——點、反對に點——線——面——立體といふ風な論理的關係にあるのみでなく、「遊戯全體」が子供の發展段階に對應する論理的なものであつたが、此の倫理主義は時として「子供の眞の生活要求」を無視

するやうな結果に陥り、子供にまつては却つて無味不可解な重荷となり、遊戯にまつてはその本質が見失はれるやうなこゝもあつたが、子供の精神性に關する此の教育的天才の獨特の把握が開拓した道は、心理主義に禍された今日の教育が新しく出直して今一度吟味して見る必要があらう。

文部省主催保育講習會

本年の文部省主催保育講習は、來る七月二十二日より、同二十七日まで、東京女子高等師範學校（小石川區大塚町市電窪町停留場）に於て開催せられる豫定の由。詳細は追て六月末日の官報にて發表の筈でございます。

申込期日にお遅れないやう、又その手續きをお間違ひなきやう、豫め御注意いたしておきます。